

紀要

36

- 初期土偶から中期土偶への展開を読み解く
 —精霊像としての土偶に関する認識の更新と深化を課題として—…………… 瀬口 眞司（1）
- 古墳時代の「石杵」状石製品について
 —蒲生郡日野町播沢遺跡出土事例の紹介—…………… 辻川 哲朗（17）
- 群集墳の築造と被葬者像
 —太鼓塚古墳群を素材として—…………… 堀 真人（24）
- 古墳時代の大刀形製品にかかる覚書…………… 宮村 誠二（40）
- 長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編2＞…………… 福井 知樹（45）
- 遺物三次元計測の実験的試行…………… 山田梨紗子・福井 知樹（64）
- 滋賀県埋蔵文化財地域展Ⅳにおける試みとその成果
 —「広げる」「深める」「育てる」「つながる」展示へ—…………… 木下 義信（78）

古墳時代の大刀形製品にかかる覚書

宮村 誠二

目次

1. はじめに
2. 古墳時代の大刀形製品の概観
3. 大刀形製品の消長と特徴
4. おわりに

— 論文要旨 —

筆者らが発掘調査を担当した滋賀県栗東市の蜂屋遺跡では、調査において大刀形石製模造品が出土した。当該資料については、今後とりまとめる予定の発掘調査報告書のなかで資料の詳細や位置づけ、歴史的評価等を示すつもりだが、そのためには関連資料の把握や先行研究における論説の理解が不可欠である。

そこで、今回は報告書の作成に向けた基礎作業として、古墳時代の大刀形製品について調べることを思い立った。本稿では、先行研究の成果を参考としつつ、大刀形製品の消長を検討し、その特徴について論じた。

古墳時代の大刀形製品には、大刀形木製品・大刀形木製立物・大刀形土製模造品・大刀形埴輪・大刀形石製表飾などがあり、これまでも先学により各種製品の消長や用途などが検討されてきたが、今回、大刀形製品全般の消長を検討したところ、古墳時代中期に大刀形製品の種類が増加したことを確認でき、当該期に祭祀の場において大刀形製品の需要が高まったことが窺えた。古墳時代中期前葉に築造された三重県宝塚1号墳での大刀形製品のあり方からは、大刀が権威を象徴する器物として認識されていたと考えられることから、当該期には、大刀の模造品である大刀形製品にも同様の意味合いが付与されていた可能性が想定される。

——— キーワード

古墳時代 大刀形製品 消長 祭祀

1. はじめに

公益財団法人滋賀県文化財保護協会が平成 28 年度～令和元年度に実施した、中ノ井川広域河川改修工事に伴う蜂屋遺跡の発掘調査では、遺跡の一角において法隆寺式軒瓦をはじめとする多量の古代瓦が出土したことで、付近に法隆寺と関わりの深い寺院跡の存在が確実視されるなど特筆すべき調査成果が得られた（宮村・福井 2019）。

こうして古代寺院跡にかかる調査成果が注目を集めた蜂屋遺跡だが、この調査では、古墳時代の遺構・遺物も多数確認されており、その一つに大刀形石製模造品があった。

蜂屋遺跡については、現在、報告書作成のための整理調査が進行中であり、いずれ報告書のなかで当該資料の詳細や位置づけ、歴史的評価等を示すつもりだが、そのためには関連資料の把握や先行研究における論説の理解が不可欠であることはいうまでもない。そこで、今回は報告書作成に向けての基礎作業として、古墳時代の大刀形製品について調べることを思い立った。

古墳時代の主な攻撃用武器には、刀剣や弓矢がある。このうち刀剣は、接近戦に用いる武器であり、古墳時代の武器のなかでも中心的な役割を果たしたと考えられる。

刀剣は、しばしば模造の対象にもなったことがそれを象った器物の存在によって知られる。本稿で取り上げる大刀形製品とは、刀剣のうち大刀を模造した製品のことで、日本列島では、実物の大刀が伝わった弥生時代中期以降にさまざまな材質や形態のものが製作・使用された。殊に、実物の大刀が広く普及する古墳時代には、大刀形製品の種類や出土例も増加したことが知られている。

古墳時代の大刀形製品には、大刀形木製品・大刀形木製立物・大刀形土製模造品・大刀形埴輪・大刀形石製表飾などがあり、これまでも各種製品の消長や用途などが検討されてきた。

本稿では、こうした先行研究の成果を参考としつつ、古墳時代の大刀形製品の消長を検討し、その特徴について論じる (1)。先行研究において個別に検討されてきた各種製品を大刀形製品という枠組みで捉え直すことにより、大刀を模造することの意義や模造対象となった大刀の意味合いなども見えてこよう。

2. 古墳時代の大刀形製品の概観

まず、古墳時代の大刀形製品を概観する。

なお、古墳時代には、ここで取り上げる製品以外に、人物埴輪に伴う大刀の造形物がある。しかし、これは人物埴輪と不可分のものであり、大刀形製品として扱うのは不適切と判断したため、本稿では検討対象から除外した。了解されたい。

①大刀形木製品

大刀形木製品は、実物の大刀が日本列島に伝わった弥生時代中期には早くも出現し（大阪府立弥生文化博物館

2007）、古墳時代にも各地で類例が確認されている（金子 1991）。

近年は、奈良県南郷大東遺跡（図 1-2、奈良県立橿原考古学研究所 2003）や大柳生宮ノ前遺跡（林部 2001）、京都府浅後谷南遺跡（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998、石崎ほか 2000）など導水施設が検出された遺跡において、その近辺から出土した事例が注目されているほか（狭山池博物館 2022）、類例には三重県城之越遺跡（三重県埋蔵文化財センター 1992）や六大 A 遺跡（三重県埋蔵文化財センター 2002）、静岡県川合遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985）をはじめ、流路や溝からの出土例が目立つ。

②大刀形土製模造品

大刀形土製模造品として静岡県の明ヶ島遺跡出土例がある（図 1-3・4、磐田市教育委員会 2003）。当遺跡では、明ヶ島 5 号墳の下層で検出された「削り出し遺構」を中心として、その付近から多量の土製模造品が出土している。出土した土製模造品には、人形、動物形、武具形、武器形、装飾品形、農工具形、什器形、漁労具形、紡織具形、楽器形などがあり、武器形では、大刀形以外に盾形、軋形、剣形、弓形、鏃形、靱形などがある。これらの土製模造品は、古墳時代中期前半を中心とする時期の所産と考えられる。

③大刀形木製立物

木製立物とは、古墳に樹立された木製品で古墳の外表施設の一つである。笠形や石見型、鳥形が主要なもので、ほかに大刀形や盾形、靱形などが少数例知られている。

大刀形木製立物は、これまでに奈良県の小立古墳、小墓古墳、御墓山古墳で出土している。いずれもコウヤマキ製で、出土古墳の年代観から古墳時代中期中葉～後期前葉に位置づけられる（鈴木 2011）。このうち桜井市の小立古墳から出土した大刀形木製立物は、全長 175.9cm、幅 14.3cm を測る大型品である。当古墳では、各種の木製立物が埴輪とともに埴丘に樹立されていたとみられる。出土した木製立物には、大刀形のほかに石見型や靱形、盾形がある（図 1-1、桜井市文化財協会 2002）。

④大刀形埴輪

大刀形埴輪は大刀を象った形象埴輪である。類例は各地に認められるが、現在知られている中では、古墳時代中期後半の奈良県掖上鎌子塚古墳の出土例が最も古く位置づけられており、畿内ではその後、古墳時代後期中頃まで、関東では古墳時代後期末頃まで認められる（浅見 2000）。

⑤大刀形石製表飾

石人・石馬として知られる石製表飾には、ごく少数だが大刀を模造した製品がある。大刀形石製表飾は、熊本県の清原古墳群と福岡県の岩戸山古墳で確認されている。古墳時代中期後半～後期前半の所産である（柳沢 1992）。

⑥その他の製品

埴輪では先述した大刀形埴輪がよく知られているが、埴

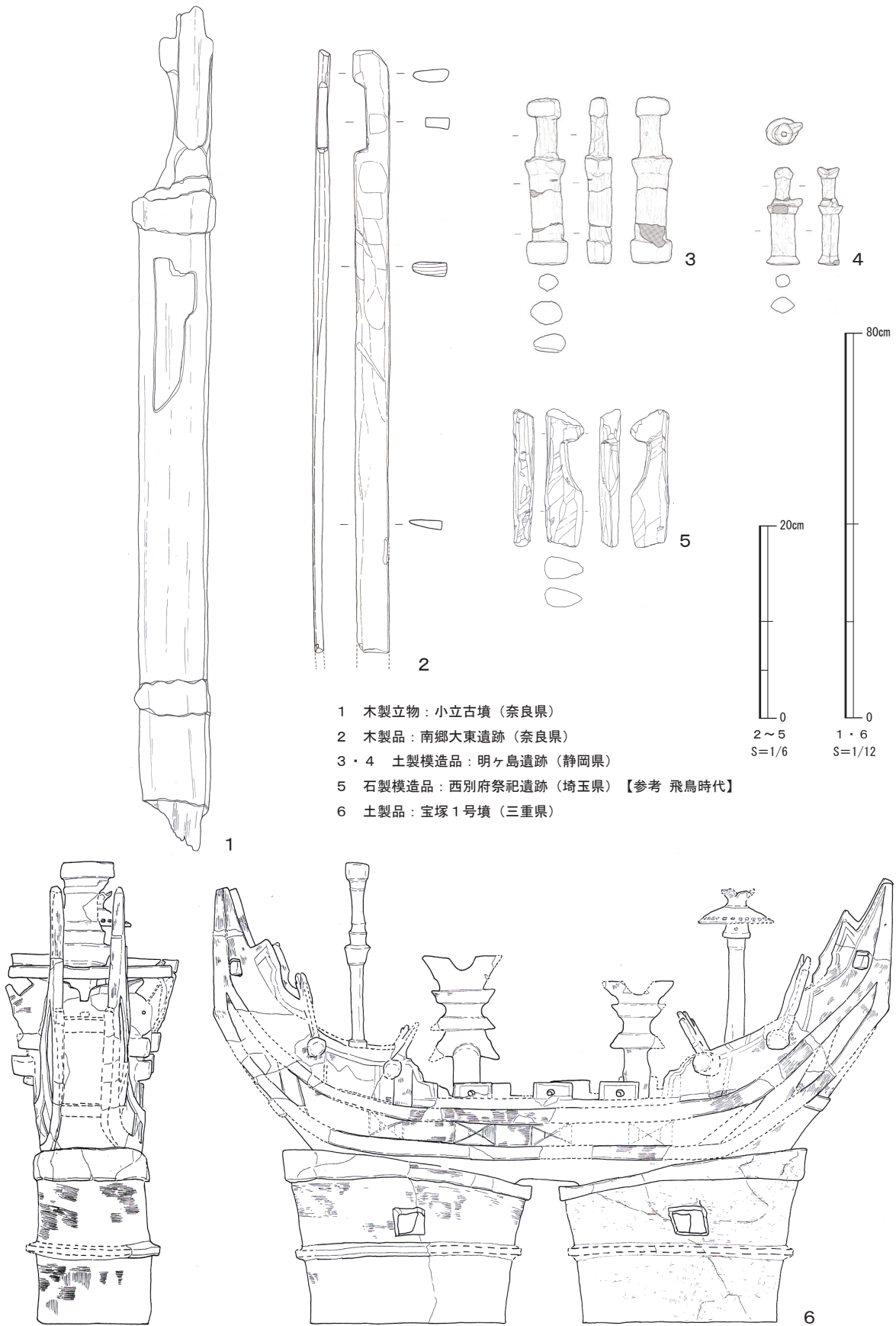


図1 大刀形製品の類例

輪において大刀を模造したより古い事例として、古墳時代中期前葉の三重県宝塚1号墳の船形埴輪に付属する大刀形土製品がある（松阪市教育委員会 2001）。これは船形埴輪の船首側の甲板に立てられていたとみられる全長 57cm の製品である（図 1-6）。この船形埴輪の甲板には大刀形土製品とともに、蓋形土製品と石見型土製品が立てられていた。

3. 大刀形製品の消長と特徴

前章において概観した大刀形製品には、古墳祭祀の舞台である古墳において用いられたものと、それ以外の場において用いられたと考えられるものの二者が認められた。

各種製品の年代観にもとづき、大刀形製品の消長を整理すると、古墳時代前期には大刀形木製品のみ存在したが、古墳時代中期にその他の製品が順次出現して大刀形製品の種類が増加したことを確認できる。そして、古墳時代にみられる大刀形製品は、大刀形木製品を除いてその多くが飛鳥時代には製作・使用されなくなったことが指摘できる。これは大刀形製品に古墳の外表施設として用いられたものが多いことによるためだが、その一方で、弥生時代から古墳時代を通じてみられる大刀形木製品は、飛鳥時代以降も存続し、律令祭祀にも用いられた。

このような大刀形製品の消長からは、古墳時代中期に祭祀の場において大刀形製品の需要が高まったことを見て取れるが、こうした動向を考える上で注目されるのが、古墳時代中期前葉に築造された宝塚1号墳での大刀形製品のあり方である。当古墳では、大刀形製品が威儀具である蓋を象った土製品や権威を表徴する器物とみられる石見型土製品（2）とともに船形埴輪の甲板に立てられていたが、このことは当該期において大刀が権威を象徴する器物として認識されていたことを示唆する。大刀の模造品である大刀形製品にも大刀と同様の意味合いが付与されていた可能性が考えられよう。

また、今回、大刀形製品との関係について検討できなかったが、古墳時代前期後半以降にみられるようになる祭祀遺跡での実物の大刀の出土事例は、古墳時代の祭祀と大刀および大刀形製品との関係を考える上で注目される。

なお、古墳時代の模造品として真っ先に思い浮かぶのが古墳や祭祀遺跡から数多く出土している石製模造品だが、蜂屋遺跡出土資料の類例を見出すべく資料を可能な限り検索したけれども、そのなかに大刀形製品の報告例を見出すことができなかった（3）。同じく刀剣を模した剣形石製模造品や刀子形石製模造品が古墳や祭祀遺跡において多数確認されているのとは対照的であり、祭祀のあり方や目的、意味を考える上で興味深い。

4. おわりに

以上、簡単にではあるが、先行研究の成果を参考としつ

つ、古墳時代における大刀形製品の消長について検討した。その結果、古墳時代中期に大刀形製品の種類が増加したことが判明し、当該期に祭祀の場において大刀形製品の需要が高まったことが窺えた。

蜂屋遺跡での大刀形石製模造品との出会いから大刀形製品に興味をもち、いろいろと調べてみた。将来的には本稿で論じた点も踏まえて、当該資料を位置づけ、評価したいと考えている。また、古墳時代の大刀形製品については、今回の作業を通して見えてきた研究課題もある。今後は資料の検討を進め、この研究課題に取り組むことで、大刀形製品やそれを用いた祭祀について理解を深めていきたい。諸賢のご教示・ご批判を乞う次第である。

〔謝辞〕

本稿を作成するにあたり川嶋泰輔氏、高島悠希氏には学問的刺激をいただいた。記して感謝する次第である。

註

- (1) 大刀形製品を検討対象として取り上げる上で問題となるのが、その認定基準である。刀は慣例として身の長さによって刀子・短刀・小刀・大刀などと呼び分けられるが、そこに厳密な区分の基準はない。そのため、大刀の長さについて具体的な数値を示して解説したいいくつかの文献を参照しても、「刀のうち短いものを刀子、長いものを大刀という。大刀には全長 30cm くらいから 150cm くらいに達するものまでいろいろあるが、80cm くらいのも、すなわち刃渡り 6,70cm のものをもっとも普通である」（西川 1966, p.252）といった説明や「長い刀を大刀と呼んでおり、その場合には 60～70cm 程度以上を目安としているが、はっきりと区分できるわけではない」（新納 1991, p.26）といった説明がなされている。古墳時代の大刀形製品の検討にあたっては、とくに刀子形製品と区別して大刀形製品を認定したいが、実物と同様、両者を明確な基準に則って区別することは難しい。
- (2) 和田一之輔は石見型埴輪の祖形論について述べる中で、石見型埴輪の祖形が権威を表徴する性格をもつことを指摘している（和田 2015）。
- (3) 古墳時代の事例ではないものの、大刀形石製模造品の可能性が指摘されているものに埼玉県熊谷市の西別府祭祀遺跡の出土資料がある（図 1-5、熊谷市 2015）。当遺跡は主として飛鳥時代から平安時代にかけての湧泉に対する祭祀の遺跡である。祭祀は、7 世紀代の石製模造品を用いた祭祀から 8 世紀以降の土器を用いた祭祀へと変遷し、また、時期によって祭祀を行った場所が変化することも推定されている。

大刀形石製模造品の可能性がある資料については、馬形であるとの見方も示されているが、大刀形石製模造品であれば、その系譜はどこに辿れるのか、蜂屋遺跡出土資料との関係性も注目される。

文献一覧

- 浅見恵理（2000）「西と東の大刀形埴輪」『埴輪研究会誌』第4号
埴輪研究会
- 石崎善久・黒坪一樹・福島孝行（2000）「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第93冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 磐田市教育委員会（2003）『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 二子塚古墳群 明ヶ島古墳群 土製模造品の調査他』
- 大阪府立弥生文化博物館（2007）『稲作とともに伝わった武器』
- 金子裕之（1991）「武器・武具・農耕具」『古墳時代の研究』第3巻 生活と祭祀 雄山閣出版株式会社
- 熊谷市（2015）『熊谷市史 資料編1 考古』
- 古代歴史文化協議会編（2022）『刀剣—武器から読み解く古代社会—』ハーベスト出版
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター（1998）『京都府遺跡調査概報』第83冊
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（1985）『宮下遺跡 内荒遺跡 川合遺跡』
- 桜井市文化財協会（2002）『磐余遺跡群発掘調査概報Ⅰ—小立古墳・八重ヶ谷古墳群の調査—』
- 狭山池博物館（2022）『大阪府立狭山池博物館図録36 古墳時代導水施設の儀礼』
- 鈴木裕明（2011）「埴輪樹立と木製立物」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- 奈良県立橿原考古学研究所（2003）『南郷遺跡群Ⅲ』
- 新納泉（1991）「武器」『古墳時代の研究8 古墳Ⅱ 副葬品』雄山閣出版株式会社
- 西川宏（1966）「武器」『日本の考古学』Ⅴ 古墳時代（下）河出書房新社
- 林部均（2001）「大柳生遺跡群第12次」『奈良県遺跡調査概報』2001年度 奈良県立橿原考古学研究所
- 松阪市教育委員会編（2001）『国史跡 松阪宝塚1号墳調査概報』
- 三重県埋蔵文化財センター（1992）『城之越遺跡—三重県上野市比土—』
- 三重県埋蔵文化財センター（2002）『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六太A遺跡発掘調査報告』
- 宮村誠二・福井知樹（2019）「滋賀県栗東市蜂屋遺跡の発掘調査」『古代文化』第71巻第2号
- 柳沢一男（1992）「石人石馬」『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ 埴輪』雄山閣出版株式会社
- 和田一之輔（2015）「石見型埴輪の東国波及と上番」『利根川』37 利根川同人

挿図典拠

図1 各文献掲載図をもとに宮村作成

（みやむら せいじ：調査課 主任技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.36 2023.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages